

## プログラム・ノート

相場ひろ

### ドビュッシー：チェロ・ソナタ

クロード・ドビュッシー(1862～1918)は1915年からさまざまな楽器編成による「6つのソナタ集」を企画したが、後に彼の命を奪うことになる病に悩まされたために、書き上げることができたのはチェロ・ソナタとフルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ、ヴァイオリン・ソナタの3曲のみであった。これらはいずれも19世紀的な意味でのソナタとは一線を画し、フランソワ・クーブラン(1668～1733)に代表されるフランスの古典音楽に範をとったものとなっている。チェロ・ソナタは「プロローグ」「セレナード」「終曲」の3楽章からなり、後半2楽章は続けて演奏される。さまざまな技巧と共に五音音階やスペイン趣味などの語法が盛り込まれ、全曲にわたってラプソディックな展開をみせるのを特徴とする。

### ブーランジェ：3つの小品(チェロとピアノのための)

ナディア・ブーランジェ(1887～1979)は9歳でパリ音楽院に入り、作曲の道を目指したものの、豊かな才能を持った最愛の妹リリ(1893～1918)がわずか24歳で夭折した後は創作の筆を折り、指揮と教育に活動の場を移した。特に教育者としてはレナード・バーンスタイン、アストル・ピアソラ、矢代秋雄など、世界中から門下生を受け容れて彼らの才能を開花させ、20世紀の音楽史に巨大な足跡を遺すこととなった。

1911年、ブーランジェは『オルガンのための3つの小品』を作曲した。1914年には、そのうち第3曲「即興」と第2曲「小カノン」をチェロとピアノ用に編曲してそれぞれ第1曲、第2曲とし、さらに1曲を付して『3つの小品』を完成させた。

### ブーランク：チェロ・ソナタ

フランシス・ブーランク(1899～1963)は正規の音楽教育を受けずに個人レッスンによってピアノや作曲を学び、第一次大戦後に作品を発表し始めると、たちまちに時代の寵児として多くの注目を浴びるようになった。厳粛な宗教作品から機知に富んだ器楽作品まで、多岐にわたる創作活動の中で、さまざまな楽器のためのソナタを生涯にわたって書き続けたことでも知られる。チェロ・ソナタは1940年に書き始められたものの、完成したのは1948年のことであった。3楽章構成が基本である彼のソナタの中で例外的に4楽章構成をとり、中間2楽章の鮮やかな対比にブーランクの面目躍如といった趣がある。